

論文

戦争と号外（1）

——号外の誕生から日露戦争まで——

小林 宗之*

はじめに

「号外は手より手に渡され読む人悉く喜色满面我の活動飛躍に反して彼が仁川に於ける不手際先づ以て幸先よしと第一の吉報に接せる昨日の市中は又一段の活気を呈せり…(以下略)」(1904(明治37)年2月10日付『東京朝日新聞』)

冒頭引用したのは、日露戦争が始まった時の市中の様子を書いた記事の一部である。江戸時代末期、日本に定期性を持った新聞が誕生して以降、何か大きなニュースや事件が起こった際に、それをいち早く報道するための手段として、その定期発行の枠を外して臨時に発行される「号外」というものが誕生した。号外は朝刊や夕刊発行までの時間差を埋めるための速報媒体として、また新たな読者を獲得するための手段として、様々な変化を遂げつつ発展してきた。日本の新聞史の中で、新聞が商業的に成功するために号外は必要不可欠な存在であったといっても過言ではない。

日本の新聞史上、最も号外で報じられたニュースは「戦争」であった。特にラジオが登場する以前は、遠く離れた戦場の様子を知ることができるのは新聞だけであり、とりわけその中でも号外は、刻一刻と変わる戦地の状況をいち早く知ることができることで人々に歓迎された。

近代日本が直接または間接的に経験した戦争とそれをめぐる報道の中で、号外がどのように発展してきたのかを探るのが本論文の目的である。本稿では、その1回目として、まず号外の誕生した戊辰戦争から日露戦争までを取り上げる。

1, 号外とは

1-1 号外の定義と役割

号外とは何か。号外は、「その名の示すごとく、号を追って発行される新聞本紙とは別に、突発したニュースや事件を本紙発行以前に、いち早く伝える号数のついていない臨時新聞」(羽島知之, 1995: 9)などと定義される。つまり、何か大きな事件や出来事があった場合に、日々の号を追って発行される新聞の発行サイクルを外して、そのニュースの速報のために臨時に発行、(現在その多くは)街頭で無償配布される新聞のことである。

通常、新聞に掲載されるニュースは、それ単体で扱いの大きさが決まるわけではない。その日に入ってきたニュースの中からニュース価値を比較して、紙面編集が行われる。それに対して、号外の場合は、その場その場で入ってきたニュースに対し、号外として報道するか、あるいは次の朝刊ないし夕刊まで待つか、といった選択になる。号外の発行基準については、各社とも明文化された規定はなく、「大事件、事故のような幅広い読者から驚きを持たれ

キーワード：新聞、号外、戦争、報道

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2010年度入学 公共領域

るニュース」等、曖昧なままとされており、発行を決める立場の人間（編集局長等）の判断に因るところが大きい（小林宗之，2008：35-36）。

号外の役割を考えると、まず挙げられるのがニュースをいち早く読者に伝えるという速報性である。そのため、号外にはスピードが求められ、必然的に内容も簡潔なものであることが多い。したがって号外はニュースの「速報」であって「詳報」ではない。大事件をいかに早く、他紙（特に競合紙）よりも早く速報するか、そのことに各社しのぎを削ってきた。またその競争に勝つことで自社の新聞の評価を高め、本紙の部数増加につなげる、読者獲得のための手段というのも、号外の役割の一つである。

速報というものについて、村上直之は16、17世紀イギリスのプロードサイド研究を通して、この当時から「すでに「速報性」すなわち《同時性》への飽くなき志向を有していた」（村上，2010:56）と述べており、号外の発達史は、新聞メディアにおける同時速報性への試行錯誤の歴史であるといえる。

1-2 先行研究

号外の歴史に関する研究は、出雲路敬豊（1938）と、渡辺一雄（1963）がまず挙げられる。これらが、私の知る限りで号外の定義や役割、歴史について詳しく述べられた最初の文献である。この後、山本文雄（1967）、小野秀雄（1969）、田村紀雄（1974）などがある。

しかし号外は、新聞の縮刷版やマイクロフィルムにも殆どなく、国立国会図書館法で規定されている納本制度の対象になっていないことから、国会図書館にも所蔵は殆どない。そのため、号外研究には専ら収集家によって集められてきた資料が基になっていたが、1995年から1997年にかけて、羽島知之により全12巻に亘る号外集成が刊行され、これまでにない資料の整備が行われた。これは、幕末以降、1995年5月16日のオウム真理教の麻原彰晃代表（当時）が逮捕されるまでの号外をまとめたもので、号外の研究をする上で欠く事ができない文献である。

近年、新聞のデータベース化が進んできており、まだ十分であるとは言えないが、データベースによっては号外も収録されるようになってきている。

試みに、朝日、読売、毎日の3紙のデータベース¹に収録されている号外を、戦争ごとにまとめると以下の通りになる。

表：各新聞社のデータベースに収録されている号外の数

	西南戦争	清仏戦争	日清戦争	日露戦争
東京朝日新聞	—	—	66	239
大阪朝日新聞	—	14 ²	59	323
読売新聞	2	0	1	0
東京日日新聞	7	1	41	26

※データベースを基に³、筆者作成

朝日は東西とも、後述する発行回数に対して、収録されている数は多いが、読売と毎日（東京日日新聞）には殆ど収録されていない。これは、この両社は号外を発行していなかったということではなく、他の資料などで号外発行の記録は確認できるが、原紙が（少なくとも発行元の新聞社に）所蔵されていないためである。こうした点から、まだまだ号外に関する研究は十分に行われていないのが現状である。

新聞の歴史の中で、戦争は常に重要な出来事であった。アメリカとスペインの間で行われた米西戦争（1898年）は、アメリカの新聞人、ハースト（William Randolph Hearst）の“You furnish the pictures and I'll furnish the war”（君は絵を描け、私が戦争を用意する）の言葉に見られるように、新聞によって煽り立てられ、センセーショナルな記事売り物にした激しい発行部数競争が、ピューリツァー（Joseph Pulitzer）の『ニューヨーク・ワールド』とハーストの『ニューヨーク・ジャーナル・アメリカン』との間で展開されたことは、新聞史の中でよく知られている⁴。

日本においても、小野（1922）以降、通史の中でも少なからず扱われており、号外が新聞史の中で重要な位置づけであったことがわかる。明治時代の日本にとって本格的な対外戦争となった日清戦争、日露戦争になると、有力紙は次々と特派員を戦地へ派遣し、戦争の様子を報道し、国民の戦争に対する関心も高まった。日清戦争、日露戦

争を経て、新聞は部数を大きく伸ばし、発展したことは、各新聞社の社史に詳しい。

2, 号外による戦争報道

2-1 明治初期の号外と戦争報道

日本において号外で戦争が報じられたのは、1867（慶応3）～8年の戊辰戦争まで遡ることができる。1868年5月16日付の『別段中外新聞』がそれで、5月15日の戦況を翌16日に本紙とは別の「別段」⁵として報道したものであり、上野東叡山に立て籠もった彰義隊を撃破する様子が、8ページにわたり記されている。同号外は日本最初の号外であるといわれており、戦争報道で日本の号外史は始まったといっている。

『中外新聞』は同年2月に柳河春三によって創刊された佐幕派の新聞で、形態は当時の日本の他の新聞と同じく和紙に木活字刷りの冊子型で本文は4丁、そこに「風聞の俣写し留む」として上野での戦況を報道している。また、福地源一郎が発行した『江湖新聞』第20号（1868年5月18日付）に、「去ル十五日東叡山の始末ハ中外新聞に記し別号として之を刊行せり故に我新聞には之を載せず」と書かれている。

1875年（明治8年）に起こった江華島事件では、『東京日日新聞』が翌1876年3月2日付で「第一千二百六十八号付録」⁶として、号外を発行、冒頭に次のように書かれている。

「今早朝に下ノ関から朝鮮一件の大吉報が 電報にて達しましたが、最早配達人も出切り跡なれども皆様お待ちかねの事件なれば態々小紙に刷りまして今日再び配達いたします」⁷。

ここまでの戦争による号外は、一つの戦争ごとに1枚から、多くて数枚といった程度の、資料や記録が散見されている程度であるのに対し、戦争での号外が質量ともに多少まとまった形で確認されるのは、1877（明治10）年に起こった西南戦争からである。

西南戦争では、『東京日日新聞』社長の福地自ら特派員となって戦地から記事を送ったほか、『郵便報知新聞』も犬養毅を前線に送り、同紙の矢野文雄、『朝野新聞』の成島柳北も京都まで出向き、戦報を送った（図1の『郵便報知新聞号外』の中に、「戦地直報 第六回」として、犬養の署名入りの記事が入っている）。

西南戦争の号外について、『東京日日新聞』では、データベース上で7枚（うち1枚は、戦後の凱旋式の様子を報じたもので、直接戦争に関わるものは6枚）収録されており、戦争の開戦から途中経過、戦争終結までの流れが、号外により報じられたことがわかる最初の戦争である。このときは、「本日ハ例に依て停刊の当日なれども（中略）世人は又かと首を延し該地の景況如何を聞くに熱望するもの極めて多きを知る因て・・・（以下略）」（1877年6月3日付『東京日日新聞』号外）と、号外発行の理由に休刊日ということが挙げられているものが見られる（6枚中3枚）。この時すでに当時の人々が戦況の報道を求めていたことも、号外から窺い知ることができる。

また図1の『郵便報知新聞』号外のように、特派員として派遣された記者の署名入りで戦地からの情報を報じた号外や、西郷隆盛の首が行方不明であることを報じた、1877年9月25日の『読売新聞』付録などもある。

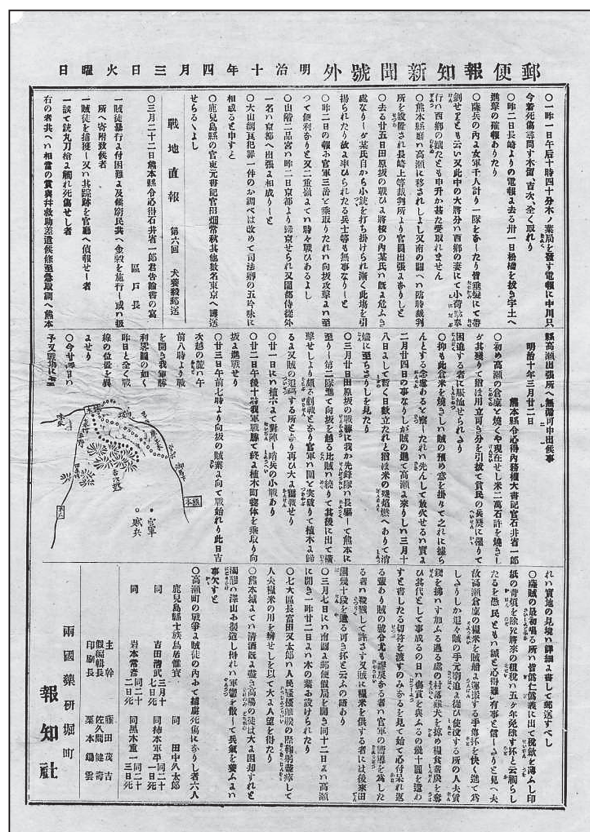


図1：西南戦争の戦況を報じる 1877年4月5日付『郵便報知新聞』号外。筆者所蔵⁸。

2-2 清仏戦争と号外

1884(明治17)年に起こった清仏戦争は、ベトナムの領有をめぐって清国とフランスとの間で戦われた戦争である。土屋礼子は10年後の日清戦争とあわせて「このふたつは、アジアでの帝国主義の展開を決定的にした重要な意味を持つ戦争」と指摘し、「清仏戦争が起きると、多くの記者が特派員として上海、天津などに派遣され、日本の新聞は初めての国際的な報道戦を展開した」と述べている(土屋, 2009: 8)。

清仏戦争も、西南戦争と同様に、数は多くはないが号外で度々報道されている。資料が確認できる範囲で一番多いのが『朝日新聞』で、前述のデータベースにも14点が収録されており、刻々と変わる戦況を報道している。「左の電報は午前九時十分東京よりの通信に係るものにて即今尤も世人の注目するものたれば取敢ず号外を以て看官諸君の一覽に供す猶後報あらば続々報道すべし」(1884年8月24日付『朝日新聞』号外)と、西南戦争のような休刊日が理由の号外発行というのは見られなくなり、入ってきた情報が人々の注目するものであるから、という理由の号外発行となっている(図2)。朝日新聞の社史には「十七年中を通じて紙面にあらわれた清仏紛争関係のニュースは約二百項目にも及んだ」(朝日新聞百年史編集委員会, 1990: 119)と述べられているほか、長野一枝を上海に派遣(後に早見純一に交代)するなど、戦争報道に力を入れていたことがわかる。

また、この頃に限定的に見られる号外として、「ハガキ号外」というものがある。筆者の手にあるものでは、1884年8月31日付で『東京日日新聞』が発行したもので、戦争開戦を報じている(図3)。

羽島知之はハガキ号外について、「配達の人手不足を補うためと、郵送による購読者へのサービスとみられる」(羽島, 1997a:10)と説明している。まだ鉄道による新聞輸送が整備される以前の明治10年代から20年代初め頃に僅かに見られ、葉書にニュースを印刷して遠方の読者へ郵送されたもので、こういった形であっても、当時は十分に速報として意味があったことがわかる。

清仏戦争を中心とした明治10年代後半⁹⁾、戦争の速報というものが、新聞各社の中で単に休刊日の穴を埋めるという位置付けに止まらず、定期発行の枠を超えて速報するという形になっていく、そのきっかけとなった時期であり、その大きなきっかけとなった出来事が、戦争であった。

2-3 日清戦争と号外

日清戦争(1894(明治27)~5年)は、近代日本が初めて経験した本格的な対外戦争であり、人々の関心は高かった。

日清戦争開戦5年前の1889(明治22)年、大日本帝国憲法発布において、憲法の条文をいかに早く報道するか、各社競争が起こったのを機に、号外による競争が本格化する。

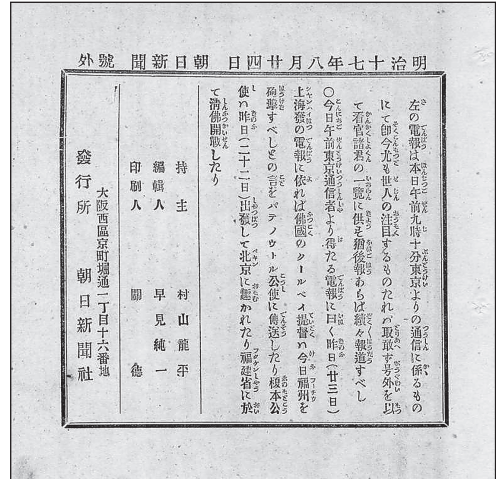


図2: 1884年8月24日付『朝日新聞』号外

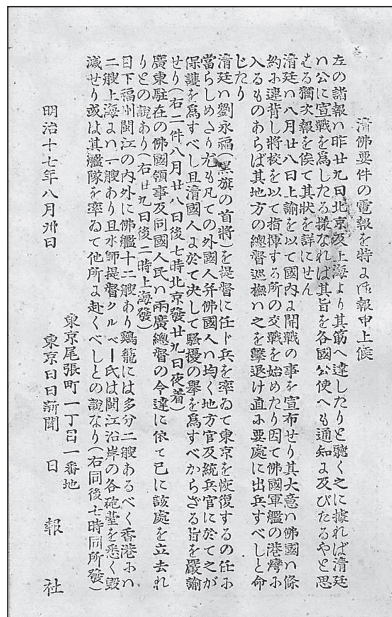
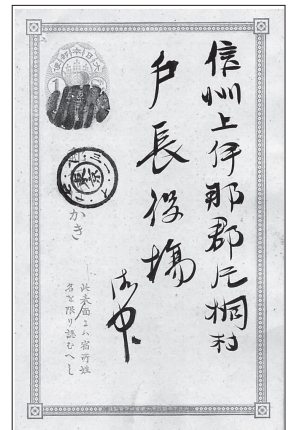


図3: 清仏戦争開戦を報じたハガキ号外



日清戦争が始まると、各社競って号外による速報合戦が行われ、刻々と変わる戦況、講和会議の様相、その後の三国干渉へと展開していく過程で益々激しさを増していった。この時から、部隊の動き、戦闘の様子、死傷者の数に至るまで、事細かに号外で報道されるようになった。羽島 (1997c) に掲載されている「号外明治史目録」には、1894年と95年の2年間の号外が355枚収録されている。同目録に収録されている日清戦争以前、すなわち1868(慶応4)～83(明治26)年までの26年間の合計が116枚であるから、いかに多いかがわかる。

このとき、東京では「号外売り」という新しい職業が誕生した。これ以降、これまで無料配布されていた号外が、東京では有料で売られるようになった。

日雇い労働者の平均賃金が28銭であった¹⁰当時、号外の値段は、多くは1枚当たり1～2銭であった¹¹。号外売りはしばしば問題を起し、規制が行われることもあった¹²が、アジア・太平洋戦争をはさみ、昭和30年代頃まで続いたといわれている。一方関西では従来同様、無料で配布が続けられた。

日清戦争中に発行された号外について、朝日新聞の社史によれば、1894年中に発行された号外は確認されているだけでも66回、翌95年は80回とあり、「他紙と比較する資料がないので即断はできないが、大朝の近畿圏制覇をほとんど不動にしたのが号外による勝利だったことは、新聞発達史の通説となっている」(朝日新聞百年史編集委員会、1990:324)とある。このように、日清戦争期の号外は、新聞自身の勢力を拡大し、新たな商売を生み、号外というものの影響力を示したものといえるだろう。

3. 日露戦争と号外

3-1 日本の新聞史上最大の号外競争

号外による競争が最も激しかったのが、1904(明治37)～5年の日露戦争であった。このときの『大阪朝日新聞』と『大阪毎日新聞』の号外合戦は凄まじいもので、戦争中の両社の号外発行回数は、『大阪朝日新聞』が389回、『大阪毎日新聞』が498回という記録が残っている(田村紀雄、1974:170)。

また同様の号外の頻発は大部数を持つ新聞に限ったことではなく、地方紙においても同様であった。前述の「号外明治史目録」によれば、1904～5年の2年間で、実に1809枚もの号外が収録されている。これだけ号外が頻発され、無償配布されると、当然のことながら号外発行の経費が社の経営を圧迫することになり、号外発行の経費に耐えられなくなった社では、号外に「一枚金二銭」と値段が書かれるようになり、また「本紙読者に限り無料配達」という、自社の読者には号外を無料で配達するが、読者ではない人へは有料、ということが示される文言が入っている号外も出るようになった(小林、2008)ほか、号外の発行により、経営破綻した新聞社もあった¹³。

日露戦争時には号外の回数だけでなく、如何にして他紙より早く発行するかという工夫も随所に見られるようになる。春原昭彦は、「日清戦争の号外合戦がスピードを競う争いであったのに対し、今回の競争は量の競争」(春原、2003:119)と述べている通り、後にも先にも例を見ない量が発行されたが、決してスピードがおろそかになったわけではなく、日清戦争以上に、速報に対するこだわりが見られた。この時期に登場した号外の一つで、「予想号外」(刷置号外、ともいう)というものがある。第一報から号外配布までのタイムラグをいかに少なくするか、といった面から考案されたもので、事前に印刷しておいて販売所などに置いておき、第一報が入ったと同時に配り始めるという号外である。号外史の中では、戦争の際に用意されることが多い。もうすぐ起こるであろうことを既に号外にして印刷しておくので、内容は見出しと記事1～2行といった、非常に簡素なものである。この号外によって、第一報から配布までのタイムラグが大幅に短くなった一方、事前に漏れて騒ぎになるといった弊害も生んだ。

各社速さを競う中で、誤報もしばしば起きている。誤報は、主として旅順の戦況に絡んだものが多い。内容とし

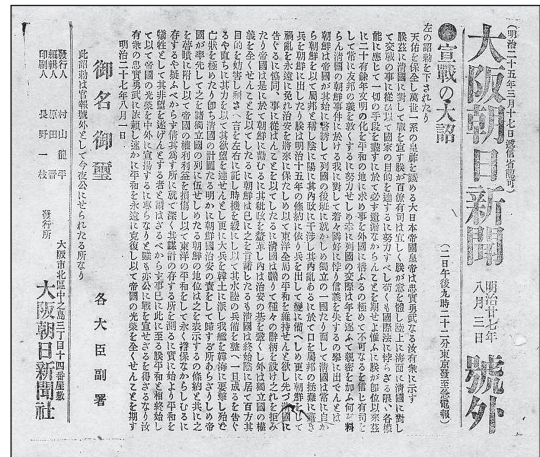


図4: 日清戦争開戦を報じる『大阪朝日新聞』号外

ては、実際に陥落する随分前に、「陥落」や（ロシア軍の）「司令官自殺」などを報じたものがある。図5もその一つで、福島県の地方紙である『福島民友新聞』が、1904年8月8日付で発行した号外である。「旅順司令官の自殺」という見出しで、ロシア軍の旅順要塞司令長官のステッセル陸軍中将の自殺を報じている。このとき、号外ではないが8月11日付の『大阪朝日新聞』は「或る確かなる筋に達したる情報に依れば敵軍には此程来神経に異常を来し病院に収容さるゝもの多しとの事なり（中略）此異常者中高級将校も認めらるゝと云へばステッセル中将の自殺説は此辺より起こりしものならんと想像せらるゝ」と報じている。ステッセル死亡報道は、この後同年11月26日にも『大阪朝日新聞』で、翌27日付で石川県にある『北国新聞』が、それぞれ号外で報じた。

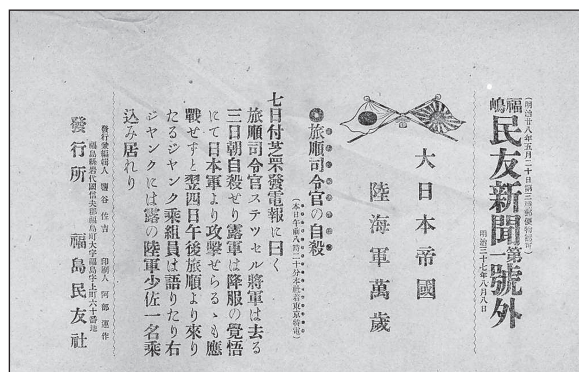


図5：ステッセル自殺を誤報した『福島民友新聞』第一号外

また、旅順関係以外の内容では、「バルチック艦隊旗艦沈没」（1905年1月7日付『大阪毎日新聞』号外、同艦隊の旗艦が、アフリカ・マダガスカル沖で沈没したという内容）といった誤報号外もある。このように、しばしばフライングのような出来事も起こしながらも、各社とも如何に早く号外を出すか、様々な工夫がなされ、それが一気に噴出したのが日露戦争の号外競争であった。

旅順陥落、奉天占領、日本海海戦と日本の大勝利の号外が続き、やがて主題は講話問題に移っていく。刻々と変わる講和会議の速報も、各社が発行する号外によって伝えられた。

1905年8月15日『大阪毎日新聞』第7863号付録「講和談判電報」は、「これ空前の大戦争を終結せんとする空前の大事業なればこれが最大の報道は日本国民の一刻瞬時も速やかに知らんと欲する處なり」として、小村全権の一行に特派員を同行させている事を伝え、さらに「講和談判の消息を裏表より電報し本社は其重要ある者を日々号外となして読者に報道しつゝあり」其報道の正確にして迅速なるは勿論東洋新聞紙中斯く多数の電信語数を発するものは一もこれなく（中略）「大阪毎日」にあらざれば講和問題の詳細を知るを能はず」と書いている。

日本時間の9月5日、講和条約が調印され日露戦争は終結する。その前後には講和反対の動きが日本国内では湧き上がり、日比谷焼打事件などの暴動が起こった。その結果、9月6日には東京周辺で緊急勅令に基づく厳戒令が敷かれるに至る。新聞も一部の社を除いて講和反対の動きを煽り、暴動の様子も「東京は第二の露都」（9月5日付『大阪朝日新聞』号外）、など、号外によって報じられた。

3-2 新聞販売店と号外

これだけの号外競争が行われると、一体誰がそれを配るのか、という疑問がある。当時その任務は、前章で述べた号外売りのほか、新聞販売店が担っていた記録がある。『毎日新聞販売史』や新聞販売店の社史を見ると、戦争時に限らず、号外配布を販売店が担い、その時の苦労が詳細に書かれている。

号外を出すことが決まると、新聞社は販売店にその旨電報を入れる。配布のための用意をさせるためであるが、その電報を基にして、新聞販売店が新聞社からの号外に先んじて号外のようなチラシを発行するということがあった。

図6は、「東京朝日新聞社より只今左の號外送付の急電に接したり」の後、内容は「旅順口陥落したり」の一行のみと、極めて簡素である。

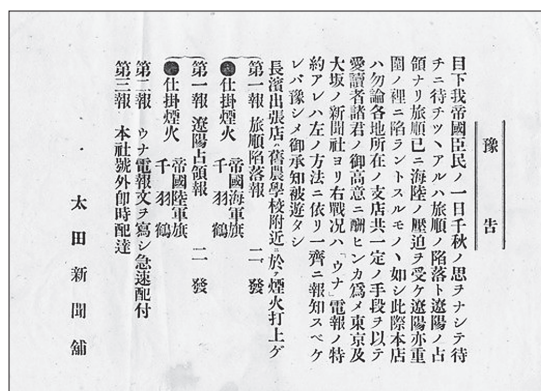
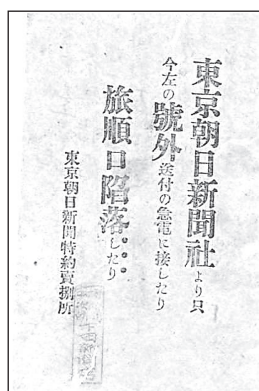


図6 (左)、図7 (右)：販売店が発行したチラシ

その文面から「只今号外」とも呼ばれる。新聞社からの号外を待つまでもなく、販売店がこのようなものを配ったということである。

また号外以外の手段で“速報”を行おうという店もあった。図7は、長浜にある太田新聞舗が発行したチラシで、「目下我帝国臣民ノ一日千秋の思ヲナシテ待チニ待チツ、アルハ旅順ノ陥落ト遼陽ノ占領ナリ」として、旅順と遼陽を占領した際には、仕掛煙火で速報するという。そして電報文を写したものを配布し、第三報として新聞社からの号外である。この種のチラシは各地で見られ、販売店も総力を挙げて速報に尽力したことがわかる。

3-3 当時の新聞記事から見る、号外に対する人々の反応

朝日新聞と、読売新聞の記事データベースで、それぞれ号外に関する記事を拾ってみる¹⁴。

出てきた記事の中で最も多いのは、「●号外 昨日朝鮮北清特電を採録せる号外を發し京浜読者に報ぜり」（1904年2月10日付『東京朝日新聞』）などの、号外を出したという一文のみ記事である。現在でも、号外が発行されると、新聞社によっては翌日の新聞などで「本紙が号外を發行」といった記事が載ることがあり、またテレビでも号外を配っている様子や、受け取った人々の反応をニュースで取り上げたりすることがしばしばあるが、当時も号外が発行されると、それがニュースになることが多かった。

以下の記事は、日露戦争開戦直後の様子を報じた記事である。

「●市中見聞録 号外々々の声に仁川旅順の大快報は疾風の如く天下に伝はり国民の情何者か抃喜雀躍せざらん而も狂せず騒がず満都の戸々国旗を掲げて最と静肅に祝意を表せるは軍国の態度として真に吾人の心を得たるもの将来連戦連勝の際にても斯く慎重なる態度によりて大に祝し大に賀すべきなり▲昨日の快報に接し京橋銀座通りより日本橋神田の各区先づ海陸軍旗を戸毎に掲げて祝したれば延いて他の各区場末に至るまで旭の御旗の翩翩たるを見たり去れば号外の声聞く度に人々争ふて求め意外の収入あるより車夫人足等皆業を廢して号外売となり我社門前の如きは大多数の号外売常に市をなせり而して小石川牛込辺の山の手にては号外の価一枚六錢に上れり（中略）▲市内の篤志家は昨日来新聞の号外を多数買集めて通行人や軍人に与ふるもあり或は之を店頭貼付け通行人に示し其傍へ筆太に最新号外又は帝国大勝利など、記したるもあり店頭には観る人群集して押合へり（以下略）」

（1904（明治37）年2月11日付『東京朝日新聞』）

開戦直後の勝報に市内が湧き、新聞社前には号外売りが集まり、人々が争うように号外を買い求める様子がわかる記事である。また、7月4日付の『読売新聞』には、こんな記事が載っている。

「●隣の噂 旅順陥落の報道ハ国民の待構へて居る所である、向島三囲の某家でハ此号外を一番先きを持つて来たものハ一円遣ると貼出した、夫から蠣殻町の某家でも五十錢東郷司令長官の留守宅でも五十錢遣るそうだが、東郷さんの宅で五十錢とハ流石令夫人の戦時経済が甘いと謂つて居る者がある」

旅順陥落の号外を最初に持ってきた人に、金50錢をやるという。当時の50錢といえば日雇労働者の平均賃金では1日分を超える金額である¹⁵。記事では、東郷平八郎連合艦隊司令長官の留守宅の羽振りの良さを書いているが、逆に見ればそれだけ大金を叩いても号外を待ち望んでいたということだろう。翌1905年1月に旅順要塞が陥落した後、誰かが号外を届け、思わぬ大金を手にした人がいたのかどうか、続報がないので不明である。

そのようなニュースがあった一方、翌月には、来る旅順陥落に備えての準備として新聞社から送られてきた紙片を早合点して「旅順陥落」と町内触れ回ったというニュース（8月6日付『東京朝日新聞』）、予想号外（前述）を持ち出して売捌いたというニュース（8月27日付『東京朝日新聞』）が、新聞に載った。

1905年1月に旅順が陥落すると、号外に対する熱狂ぶりはピークに達する。1月3日付『東京朝日新聞』には、「予て用意のありし事とて市中各区は直に祝捷の準備に着手し（中略）各新聞社前は常よりも十倍大の紙片に旅順陥落、敵将校服など筆太に記して号外發行の混雑恰も戦地の如し」と、戦勝に沸き立ち、号外を争うように求める人々の

様子を書いている。

歌人で国文学者の佐佐木信綱は、38年後の1943（昭和18）年1月1日付の『朝日新聞』で、この時の様子を次のように回想している。

「彼の日の感激は忘れられない。彼の一月二日の日の感激は、深く胸の底に残ってをる。

号外、号外の甲高い勇しい声、鈴の音が高鳴り響くので玄関に出ると、号外がおいてある。旅順陥落、旅順開城の号外である。吾々国民は、この日をいかに待ちに待ったことであらう。号外をとる手はふるへ、眼は涙にうるんだ。（中略）

小川町の大通りに出ると、門毎の国旗も喜ばしげに風にひるがへり、行き交ふ人の面にも悦びの色が溢れてゐた。（中略） いづこも皆喜びの一色であつた。（以下略）」

これらの記事から、戦勝の号外は人々に非常に歓迎され、そしてそれらの号外が、戦意高揚に一躍買っていたことがわかる。

おわりに

これまで、本論文では幕末明治初期から日露戦争までの、戦争における号外報道について述べた。テレビもラジオもなかった時代、号外はニュースの第一報を伝え、内容に人々が一喜一憂していたことが、当時の新聞記事からも見ることができる。特に日本が大勝利したことを報じる号外は、人々の垂涎の的であり、人々はそれを争うよう求めた。そしてそれを発行する側である新聞社も、他社より先に報道しようと、戦争の度に様々な工夫をこらしてきた。明治20年代以降、号外がニュースの速報として存在感を示すようになって以降、特にそれが顕著となり、時として社運をかけ、採算を度外視しても号外による速報に努めた。1894～5年の日清戦争を経て、1904～5年の日露戦争のとき、それがひとつの完成を見たと言ってもいいだろう。

2009年から2011年まで、12月にNHKのスペシャルドラマ「坂の上の雲」が放送された。劇中でもしばしば号外が登場し、人々がそれに群がる様子が描かれていた。当時、戦争ともなれば出版界は戦争絡みの企画が相次ぎ、「戦時画報」や戦時小説の出版が度々行われた。そういった大衆文化が戦争を煽り、戦意高揚をはかった。戦地の情報をいち早く伝える号外も、その例外ではなかった。

日露戦争中に博文館が出版した『日露戦争写真画報』第拾巻に、“其道の一人”という署名で書かれた「戦時号外」という文章がある。当時の号外の様子を知る上で興味深いものであるが、その中に以下のような記述がある。

「然らば、新聞社は見すみず損耗を来すを知りつつ何故に号外を発行するか、一つには職業上の義務として幾万の読者に向ってまた国民に向って、一刻も早く事の経過を知らさん為め、二には直接の損を承知しつつも、他日其の新聞の声価を高めんとする所謂間接の利益の為め、悪く言へば自己を吹聴する為め、此の二つの目的より外には意味がないのである。

銅貨一枚で号外を読む人は、願くば其れと共に各新聞社の労を思へ、又其の内実の如何を察せよ。世に号外ほど廉価なるものは無く、又之ほど愉快なるもの無しと思はば、宜しく其の辛勞に対して新聞社に謝すべしだ。」（其道の一人、1904：60-61）

ここで述べられている号外の意義は、速報性、そして号外によって自社の新聞をPRする、この2点である。後者は、それによって販売部数の増加につながるため、号外が販売拡張のための手段であったことがよくわかる一文である。そのため、各社とも社を挙げて号外発行に努めた。そして、各地の販売店が出したチラシに見られるように、販売店も、その速報合戦に便乗した。

その後の戦争でも、号外は活躍した。本論文では、「戦争と号外（1）」として、日露戦争までを取り上げた。その後の戦争と、それに対する新聞号外について、（2）以降で明らかにしたいと思う。

【註】

- 1 朝日は「聞蔵Ⅱ」、読売は「ヨミダス歴史館」、毎日は「毎日 News パック」を利用。なお、朝日は『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』の両方が収録されているのに対し、毎日は『東京日日新聞』のみ収録されており、『大阪毎日新聞』の号外は未収録。
- 2 この当時はまだ『朝日新聞』、『大阪朝日新聞』と改題するのは、1889年1月から。
- 3 具体的な調査方法は、それぞれ戦争があった年を検索期間にして、キーワードは設定せず、収録されている紙面の中から号外のみをカウントした。
- 4 ハーストのこの言葉について、原田棟一郎(1934)は、「これは有名な逸話となつてゐるが、ハースト伝の著者ウインクラー Winkler は『後年ハーストはこの電報を嘘であると否定した、しかしその当時におけるこの「チャナル」の持主の希望や態度を表現してゐることにおいて問題はない』といつてゐる」(p.243)と述べている。
- 5 「別段」とは当時「EXTRA」の訳語であるとか、長崎に来航したオランダ船から海外情報を知るために幕府に提出されていた「別段風説書」に由来するなど、いくつか説がある。
- 6 「号外」という語はこの当時は、「号外」という言葉は定着しておらず、「号外」を表す言葉に様々な語が用いられた。その中の主な一つが「付録」である。
- 7 毎日新聞130年史刊行委員会(2002)は、同号外について「特別に印刷して配達したのはこれが初めてであった。(中略)初の別配号外はこうして事件の「平和到着」を伝え、読者から絶賛された。これは郵便はがきに印刷され、地方にも発送された。新聞界では初の試みだった」(p.101)と述べている。
- 8 以下、本論文に用いられた図版は、全て筆者の所蔵資料である。
- 9 ページの都合で省いたが、この時期、朝鮮半島では壬午事変(1885(明治15)年)など朝鮮半島をめぐる日本と清国との紛争もあり、その様子は号外にもなっている。
- 10 週刊朝日(1988) p.173
- 11 この号外の値段は、他のあらゆる物の物価が変動していくにもかかわらず、1945年の敗戦まで50年近く変化がない。詳細は次稿以降にするが、興味深い点である。
- 12 1903年には「新聞号外濫発取締規則」が公布され、号外の売捌き人は何新聞の号外であるかを明らかにすること、小さなニュースをいかに大事件のように振舞ってはならない、という旨の2つがその内容である。わざわざこのような規則ができるということは、いかに問題化していたかが推測される。
- 13 渡辺(1963)に、宮崎の地方紙の例が取り上げられている。
- 14 調査は、両方のデータベースに、それぞれ「号外」&「戦争」というキーワードで検索し、ヒットした記事の中から、当時の号外配布の様子や、人々の反応、また号外にまつわる記事を拾い出した。内容が日露戦争に限られたのは、他の戦争では(本文中で述べた号外配布した旨の記事以外の)記事がほとんど見つからなかったためである。
- 15 週刊朝日(1988) p.173

【主要参考文献】

- 朝日新聞社史編修委員会(1995)『朝日新聞社史 明治編』朝日新聞社
- 羽島知之(1995)『「号外」戦後史1945-1995 I』大空社
- 羽島知之(1997a)『「号外」明治史1868-1912 I』大空社
- 羽島知之(1997b)『「号外」明治史1868-1912 II』大空社
- 羽島知之(1997c)『「号外」明治史1868-1912 III』大空社
- 羽島知之(1997d)『「号外」昭和史1936-1945 I』大空社
- 原田棟一郎(1934)『米國新聞史論』立命館出版部
- 春原昭彦(2003)『(四訂版)日本新聞通史』新泉社
- 出雲路敬豊(1938)「号外雑考」『近世印刷文化史考』大阪出版社、pp.255-266
- 川上富蔵(1979)『毎日新聞販売史 戦前・大阪編』毎日新聞社
- 小林宗之(2008)「新聞号外の変遷とニュース価値」同志社大学大学院社会学研究科メディア学専攻2007年度修士論文
- 毎日新聞130年史刊行委員会(2002)『毎日の3世紀 新聞が見つめた激流130年』上巻
- 村上直之(2010)『改訂版 近代ジャーナリズムの誕生』現代人文社
- 小野秀雄(1922)『日本新聞発達史』大阪毎日新聞社

- 小野秀雄 (1969) 『号外百年史』 読売新聞社
- 其道の一人 (1904) 「戦時号外」 『日露戦争写真画報』 第拾巻
- 週刊朝日 (1988) 『値段史年表 明治・大正・昭和』 朝日新聞社
- 田村紀雄 (1974) 『号外』 池田書店
- 土屋礼子 (2004) 「日露戦争報道と＜帝国＞の民衆 ——百年前にみる今日的課題」 『新聞研究』 No.636、 pp.48-53
- 土屋礼子 (2009) 「日本の大衆紙における清仏戦争と日清戦争の報道」 『Lutece』 37号、 pp.8-11
- 渡辺一雄 (1963) 『実録号外戦線 血みどろの報道史』 新聞時代社
- 山本文雄 (1967) 『号外大事件集成』 現代ジャーナル社

Japanese Newspaper Extras and War (1)

KOBAYASHI Muneyuki

Abstract:

Japanese publishers have historically put much effort into newspaper extras, particularly, during times of war. This paper describes how the extra developed during times of war in modern Japan. As the first section of a continuing study, the paper covers the period from the end of the Edo period, when extras were first published in Japan, to the Russo-Japanese War. Initially, extras were published to report news on newspaper holidays. However, extras began to be used on other days to publish prompt news bulletins, especially battle reports during the Sino-Japanese War and the Russo-Japanese War. Extras that told of the war situation were popular with the public, who experienced hope or fear according to the news. Extras proclaiming Japanese victories were especially welcomed by the people and raised the fighting spirit of the nation.

Keywords: newspaper, extra, war, modern Japan

戦争と号外 (1)

——号外の誕生から日露戦争まで——

小林 宗之

要旨：

日本の新聞史上において、ニュースをいち早く読者に伝える号外は、ニュースの花形とされ、新聞社も時として社運をかけて号外発行につとめた。新聞号外にとって戦争報道は最大のニュースであり、戦争の度に号外が頻繁に発行された。

本論文では、近代日本が経験した戦争の中で、号外がどのように発展してきたかを述べる。そのうちの第1回目として、幕末に号外が誕生してから1904～5年の日露戦争までを、特に資料がある程度確認できる西南戦争、清仏戦争、日清戦争、日露戦争を取り上げた。西南戦争までは休刊日に号外が出るという程度だったものが、清仏戦争期には徐々に今の号外に近い形での速報という観点が形成され、日清、日露戦争で一気にそれが噴出した。

また人々も先を争って戦況を伝える号外を求め、その内容に一喜一憂し、特に日本の勝利を伝える内容の号外は、人々に歓迎され、国民の戦意高揚にもつながった。

